

漢法苞徳塾資料	No. 057
区分	入門講座資料
タイトル	灸の適・不適について
著者	八木素萌
作成日	1990

◎この問題について、病症の解析・に基づいて、病理的な意味合いで、論じているのは、『傷寒論』である。清代の尤在涇は『傷寒貫珠集』と言う『傷寒論』の研究・解説の書中に「火逆十条」を記述している。これを研究することを通じて、灸の適応と禁忌を考えよう。

- ・「脈浮 宜以汗解 用火灸之 邪無從出 因火而盛病 從腰以下 必重而痺 名火逆也」
- ・「微数之脈 慎不可灸 因火為邪則為煩逆 追虚逐実 血散脈中 火氣雖微 内攻有力 焦骨傷筋 血難復也」
- ・「脈浮 熱甚 反灸之 此為実 実以虚治 因火而動 必咽燥唾血」
- ・「太陽病 以火熏之 不得汗 其人必躁 到經不解 必圜血 名為火邪」
- ・「太陽傷寒者 加温鍼 必驚也」
- ・「太陽病中風 以火劫発汗 邪風被火熱 血氣流溢 失其常度 兩陽相熏灼 其身發黄 陽盛則欲衄 陰虚則小便難 陰陽俱虚竭 身体則枯燥 但頭汗出 劑頸而還 腹滿微喘 口乾咽爛 或不大便 久則譫語 甚者至噦 手足躁擾 捻衣摸牀 小便利者 其人可知」
- ・「太陽病二日 反躁 反熨其背 而大汗出 大勢入胃 胃中水竭 躁煩 必發譫語 十余日 振慄自下痢者 此為欲解也 故其汗從腰以下不得汗 欲小便不得 反嘔 欲失溲 足下惡風 大便硬 小便当数而反不数 反多 大便已 頭卓然而痛 其人足心必熱 穀氣下流故也」
- ・「火逆下之 因燒鍼煩躁者 桂枝甘草竜骨牡蛎湯主之」
- ・「傷寒脈浮 医以火迫劫之 亡陽 必驚狂 起臥不安者 桂枝去芍薬加蜀漆牡蛎竜骨救逆湯主之」
- ・「燒鍼令其汗 鍼処被寒 核起而赤者 必發奔豚 氣從少腹上衝心者 灸其核上各一壯 与桂枝加桂湯」

注

追虚逐実……逐は、おいこむ・おいつめる事、故に此処は、虚を追放し実を把える事を言う。
逆治を行なっている。

到經不解……六經を經過したら太陽病は治癒しはじめる、「～至七日以上 自愈者 以行其經尽故也」「発於陽七日愈」などと『辨太陽病脈証并治上第五』に記述されている。
治る時期がきても治らない状態を指している。

圜血……圜は、かわや、故に、血便すること。

劑頸而還……劑は藥劑の事、動詞として用いているから、ここは頸部で作用して後に還るとの意

熨……ひのし

卓然……ぬきんでる事、此処はきわだっている様を形容している

以上の十条である。

概括すれば

1. 陽熱の状態に灸をすれば、それを助長する事になるので、症状の悪化を招く。
2. 胃熱の状態、津液不足の状態等に、灸して陽・熱を加えては逆治となるので、よろしくない。
3. 「微数之脈」とは微脈で且つ数脈の事である。微脈は血や津液の不足・枯渴・毀損の虚の状態を示し、数脈は熱を示している、つまり、虚熱や燥熱を示している。灸によって熱や燥を助長する事を恐れている。

◎黄帝明堂灸経に

「凡灸灸時 若值陰霧大起 風雪忽降 猛雨炎暑 雷電虹霓 暫時且停 候待晴朗 即再火灸 灸時不得 傷飽大飢 飲酒大醉 食生硬物 兼忌思慮愁擾 恚怒呼罵 吁嗟嘆息 一切不祥 忌之大吉」。とある。

注 虹霓……ニジのこと

概括すれば、

天候が甚だしく荒れている最中・暴飲暴食の状態の時・精神的消耗の甚だしい状態や情緒不安定の甚だしい状態にある時には、灸する事を避けなさいと言う事である。これらの何れも「気」が「激動」している状態で、とても手をつけられる状態ではないと、認識されている。

と言うことになる。

◎その他

▲灸痕の問題

点灸の跡は、点灸によって出来る痂皮（カサブタ）を、意識的或は無意識的に掻き剥がさなければ、灸痕は残らないものである。痂皮は表皮が再生されると自然に剥脱して行くものであり、この時には、灸痕が何時までも残ると言うことはない。

▲灸痕が痒い時

「体が灸を呼んでいる」「灸を欲しがっている」などと言う地方があるが、1～3壮くらいをすえると痒いのは治まる。水泡が痂皮の下に生じて痒い場合には、それと歴然としている時以外では、そのまま灸をすると良い。歴然としていれば痂皮を剥がさない様に注意して、水泡に漿液を抜いてから灸をすえるのが良い。

▲灸痕が化膿し易いのは皮毛腠理の分に「水滯」があるからである。

▲灸痕問題再論

上質の艾で柔らかい捻りの半米粒大程度の艾粒の場合には、3～5壮程度では火傷は極めて軽度であり、表皮が僅かに焦げた色が付く程度のものであり、表皮が炭化して黒くなるには3～5～6日連日すえた場合である。皮下組織が破壊される程の火傷の場合には、完璧な治療をしても傷痕を残す事は避けられない。瀉法の激しい打膿灸以外に、灸痕が残るのは、痒みの為に早すぎる痂皮剥離が起こった為である。表皮が完全に再生されて、自然に痂皮が離剥して脱落する場合には、灸痕は残らないものである。

◎灸治の一般的意義ほか

鍼灸治療では補瀉が極めて重要であるが、『補』とは「陽気」を与え体内に推し入れることである。治療は栄衛・陰陽を調和させる事である。灸は艾によって、身体に無理なく「火熱」という「陽」中の「陽」を加え入れるのである。故に鍼による補では足りない場合・鍼によって瀉が過ぎた場合に、灸が適当な訳である